
死神と私

冬華白輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神と私

【NZコード】

NZ3683N

【作者名】

冬華白輝

【あらすじ】

突然死んでしまい死神に追いかける羽目になってしまった主人公。

死神に説得されて向かった先は死因を調査するための施設。そこで自分の死因を知った主人公は、閻魔をめぐる事件に巻き込まれて調査することに・・・。

死神と田舎町（前書き）

ミステリーとこうじがまじく、ファンタジーとこうじで、魔法が出るわけでもなく・・・ですが、楽しんで読んで頂ければ嬉しいです

死神と出会ひ

目の前に突如現れた黒い影。

実家の職業柄か、それがいつたい何なのかわかつてしまつた私は、目を合わせる寸前に身を翻し、その影から逃げた。

それは、死神と呼ばれるものだつた。死神が迎えに来たということは、今まで病氣らしい病氣もせず、元気だけが取り得の私に寿命がきてしまつたというのか。

たつた16年しか生きていないので・・・。“まだ、死にたくない！” そう思つて、裸足のまま私は逃げた。

『里乃・・・里乃・・・』

逃げても逃げても、死神の声は追つてくる。

「・・・チツ・・・里乃、逃げんな、てめえー！」

いきなり口調が、がらりと変わつた。私は思わず振り向いてしまい、死神と目を合わせてしまった。

「捕まえたぞ、死神と田を合わせたらそれでお終いってのは知つてんだろ? ··· よし、じゃ、行くぞ」

「···あの世に?」
「···あの世に?」

私は聞かなくても解ることを聞いた。死神は、いやな顔もせず、律義に答えてくれる。

「ああ、あの世、天界、天国、靈界、いろいろ言い方はあるが、そこだ。···でも、フツー直行するんだが、おまえ達みたいな若い連中は特別、そこに行く前に調査される」

「え、どうして?」

私は思わず聞き返していた。

「···何で鬼籍に載つちましたのか、調べんのだよ」

死神は天を仰ぎながら、ぽりぽりと鼻の頭を搔く。あまりにも人間らしい仕草に、私は妙にこの死神に親近感を覚えた。

「···でも、結局はあの世行きでしょ?」

「いや、場合によつては、死神になつたり、調査チームに配属せられたりすることもある」

さりと答えた死神に私は驚いた。

「じゃあ、死神、あなたも？」

死神は眉をひそめて不快げに私を見る。

「死神って呼ぶな。オレにだつて名前くらいある。かずゆき和幸って呼べ。・
・まあ、答えはY e sだ。オレも18で死んで調査の結果によつ
て死神になつた」

「調査の結果つて? どんな結果がでるとそつなるの?」

「・・・呪殺だと死神、生け贋および身代わりだと調査チームだな」

「それって、本来死ぬはずではない人じやない」

「ああ、そうさ。だから、いつして半死半生みたいな生活してんの
さ。生き返れるわけじやねえからな。死神の仕事はメインはこうい
う鬼籍に載つたやつの迎えだが、許可が下りれば自分の復讐かずゆきも可能
だ。自分を殺したやつを殺す。調査チームの場合は、生け贋にした
人物、もしくは自分が身代わりになつた相手を鬼籍に載せることが
できる」

死神、和幸はそう言つて、にやりと笑つ。まるで、それが目的で
死神になつた、とでも言つよつ。

「や、そつなの。・・・私は、どうなるのかな?」

「フツーに理由があつての死亡ならソッコーあの世行き。でも、オ
レには、どーもおまえがフツーに死んだとは思えねえ。多分、死神
か、調査チーム入りは間違いねえな」

和幸はやつらのと、私の頭を軽く一づく。

「や、無駄話はいこままでだ。・・・行くぞ」

「う、うん」

私はあの世に連れて行かれることは変わらないこと、元のうつ、やつらまでの恐怖が嘘のようになくなつて、いるのに気がついた。

和幸のおかげかもしねない。

サーチオーロラ

私達は調査するための施設“照査室”といつといふに来ていた。
和幸が腕のエンブレムを見せると扉が開く。

バリアーのような光の幕をぐぐると次の瞬間には、まるで病室の
ような白を基調とした広い部屋の真ん中に私達は立っていた。

「秋波里乃さん、前に進んでください」

「あ、はい」

田の前にある大きな机に座っている、女人に手招かれる。

「里乃さん、あなたの健康状況は非常に良好でした。まず間違いな
く、鬼籍に載るのはもつと先だつたはずです」

「え、あ、そうなんですか・・・」

間抜けな答えを返してから、私は和幸に視線を向ける。

「調査するんじゃなかつたの？」

「さつき、光の幕をぐぐつたら？あれで全部調査できるんだ。え
と、なんつたつけか？」

「サーチオーロラです」

和幸が聞くともう何回も聞かれているようすで、ウンザリといったように女の人は溜め息混じりに答える。

和幸はそう、それそれ。と言しながら私の方に向き直る。

「そのサーチキンなんとかってのが、ゼーんぶ調べてくれるわけさ」

「サーチオーロラー」

ガタン、と立ち上がった女的人は堪忍袋の緒が切れたという顔をしながら叫んだ。

「解つてるつて、サーモンチキンだろ?」

「・・・かあ～ずう～ゆう～きにいい・・・」

「そんなに怒んなよ、沙希。^{さき} サーチオーロラだろ? [冗談も通じねえ
ヤツは嫌われッぞ」

和幸はけろりとした顔で言つて、沙希の方に私を押しやる。

「で、ここははどうぢよ?」

「決定権は上官の志^じ責^き様にあるわ」

「でも、大体の所は解るんだろう?」

ずいっと和幸が身を寄せると、沙希さんはたじろぐ。

「・・・規律違反だよ、和幸。調査チームから死神が情報を聞き出

してはいけない」

「志貴ー。」

なおも和幸が沙希さんに聞か出そうとしたとき、私の後ろから声
がかかる。ビックリしたのは私だけではないよつで、和幸も沙希さ
んも驚いた様子でこちらを見ている。

私の真横に来ると、志貴と呼ばれた男の人は私に笑いかけた。

「里乃さんには後ほど個別にお知らせします。まずはこれから使う
部屋の方に案内させましょー」

「あ、はい、ありがとうございます」

「志貴ー！なんで、おまえが最前線の照査室までくんだよ？」

和幸は掴みかかりそうな勢いで志貴さんにへつてかかる。

「・・・里乃さん、和幸は何か失礼なことをしませんでしたか？」

「おいー志貴ー！無視すんなー。」

「いえ、別に。・・・あの・・・？」

かみつく勢いで真横で叫ぶ和幸と、それを平気な顔で無視してい
る志貴さんに田をやる。志貴さんは、惑う私を見てクスリと笑う。

「ああ、僕と和幸は上官と部下という関係以前に兄弟なんですよ。
ちなみに僕が兄で和幸が弟です。詳しい話はあとで和幸に聞くとい

いですよ。しばらくは和幸があなたのサポートにつきまわかり

「あ、はー」

私は和幸を見る。和幸はじつと志貴さんを睨むように見つめている。

「やうやう、僕がどうして本来いるべきはずの閻魔様の元を離れて、ここに来たかつてこゝとな、しばらくの間、照査室を開じることになつたからだよ」

笑顔のまま、志貴さんは先ほどの和幸の質問に、やつと答えを返す。

「照査室を閉じるー..びつこつ」とです？志貴様

沙希さんが驚きの声をあげると、志貴さんは表情を曇らせる。

「うん、閻魔様があつしやるには、ちょっと問題が起つたみたいでね。今日は里乃さんが最後だったようだからここを一番最後に閉じる」としたんだよ。他の所はもうみんな閉じてある。・・・それで、君達を信頼して、頼むんだけど・・・」

「内部調査か？」

志貴さんの科白を和幸が引き継ぐ。志貴さんはじつと和幸を見つめ、頷く。

「頼めるかい？和幸」

「これやつたら・・・」

「・・・許可が下りる可能性は高くなるね」

「じゃ、やる。沙希も里乃も勘定に入つてんのか?」

「・・・沙希だけ。里乃さんは他の仕事を頼むことになりそうだ
んだ。それも後で里乃さんに直接お知らせしますから。・・・取り
敢えずここは閉じる。沙希は本部に戻つてくれ。和幸は里乃さんを
部屋に案内して」

志貴さんの指示に一人は大人しく従い、私は和幸に連れられ照査
室から宿舎に移動することになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3683z/>

死神と私

2011年12月20日15時48分発行